

地方における高等教育機会と 専門職養成大学進学者のキャリア志向 ー 青森県の福祉系大学生・卒業生へのインタビューから ー

Higher educational opportunities in a local area and career orientation of enrolled students of a professional training university : From interviews with students and the graduates of a university majoring in welfare in Aomori Prefecture

廣森直子

大阪信愛学院大学 教育学部

要 約

本稿では、地方の福祉系大学4年生・卒業生へのインタビューにおける大学進学当時の語りから、地方における高等教育機会と専門職養成大学進学者のキャリア志向の関連を考察した。半構造化インタビューを行い、逐語録に起こしたデータからコーディングによりキーワードを抽出し、福祉専門職を志望するプロセスや大学選択のプロセスに焦点化してカテゴリー化した。カテゴリーとして、1) 濃淡のある福祉職志望、2) 進学先選択過程における入試形態の影響、3) 福祉職志望と家庭環境、4) 経済事情と家庭環境、5) 地元志向と県内進学、を生成し考察した。

Keywords : 地方、大学進学、専門職養成、福祉系大学生・卒業生、キャリア志向

1. はじめに

地方において専門職養成大学という高等教育機会は若者にとってどのような意味を持つのであろうか。地方では若年層の人口流出が懸念される一方で大学進学率は上昇している。本稿で検討する青森県の年齢別県外転出入の状況(図1)をみると、県外転出は18歳が最も多く、続いて22歳、20歳が多い。これは、18歳で高卒就職や大学進学を契機として県外に転出している状況であると考えられる。青森県出身者の若者の進学と就職には極めて強力な制約がかかっており、「威信の高い大学」や「条件のよい職」は大都市に偏在するため地域間移動を経なければそれらの資源にアクセスできないといわれる¹⁾。地元志向の弱い若者たちは早い時期に県外に出してしまうため、県内に残っている若者たちを対象にした調査では地元志向は高くなりがちであるともいわれる²⁾。

筆者は、地方の福祉専門職(社会福祉士^{注1)})養成大学の「出口」の状況について、大卒や専門職の資格を得ることが経済的自立して地元に残る手段となる一方、県外就職は地元志向ゆえに消極的選択としてあること、専門職志向が強くなる一方で望む就職先とのギャップが大きくなることを見いだした³⁾。本稿では、専門職養成大学をへて就職した人の入学時のキャリア志向(進学動機)、つまり「入口」の状況を検討する。

地方圏での若者の雇用問題は、単に雇用機会が乏しいということよりも若者の仕事の選択の幅が狭く、キャリア展開がかぎられていることにあるといわれるが⁴⁾、地方では高齢化も進行し、医療福祉専門職は地域を問わず必要とされる専門職である。こうした専門職につながる進学はどのような人にめざされるのであろうか。高校生の大学進学行動と家計所得や進学先の分布、学卒労働市場との関連から高等教育機会の地域格差が指摘⁵⁾されてお

り、青森県内においても高等教育機会は地域間格差やジェンダー差がある⁶⁾ことを踏まえ、福祉系の専門職養成大学に入学してきた人の進路選択がどのように行われていたのかを考察する。

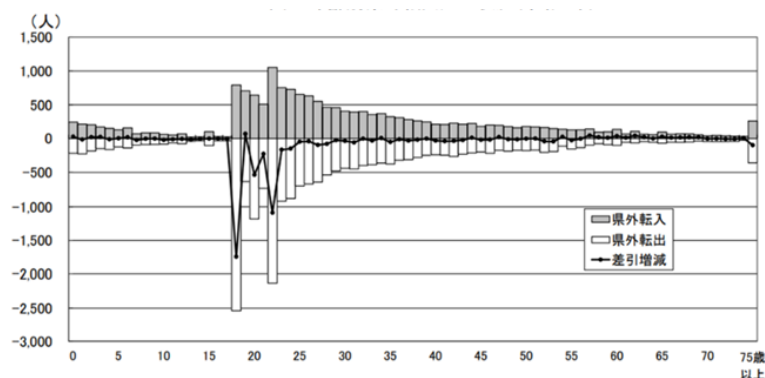


図1 青森県の年齢別県外転出入の状況（青森県統計分析課『令和3年 青森県の人口』について（概要）⁷⁾より転載）

2. 青森県における大学進学機会

青森県と全国の高卒後の進路状況を比較すると（図2）、全国に比較して10数ポイントの差を維持しながら大学進学率が上昇し、また高卒就職率が下降している。大学進学率は全国平均では1994年には高卒就職率を上回っているが、青森県で大学進学率が高卒就職率を初めて上回るのは2005年であり、どちらもほぼ3割程度の時期を経て2010年代後半から大学進学率が高卒就職率を上回る状況が定着したとみられる。

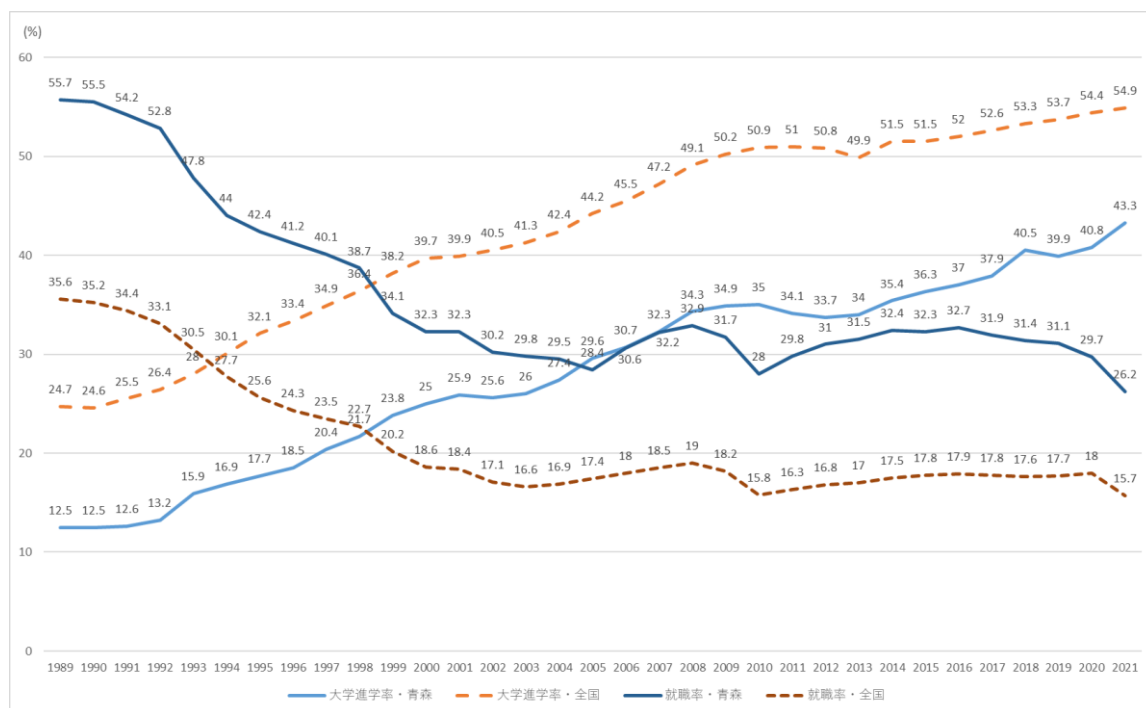


図2 1989-2021年の青森県と全国の高校卒業後の進路状況の変化（文部科学省「学校基本調査」⁸⁾より筆者作成）

青森県内には4年制大学は11校ある（国立1校、公立2校、私立8校）ものの、1校を除き主要3市（青森市、弘前市、八戸市）に所在している。こうした状況から、青森県内の都市部に大学進学機会が偏っており、県内においても大学進学の地域間格差があるといえる。青森県内の大学の定員は3,697人で国立1,322人、公立510人、私

立1,865人（青森県教育委員会「学校一覧—令和3年度—」より集計）であるのに対し、青森県の2021年3月の高等学校卒業者は10,798人、大学進学者は4,672人であり、そのうち県内進学者は国公立863人、私立1,076人であり⁹⁾、県内進学者より県外進学者のほうが多くなっている。

3. 調査の概要と調査対象者の概要

3.1 調査の概要と分析方法

3.1.1 調査期間：2016年2～3月、2017年2～4月

3.1.2 調査対象者：福祉専門職（社会福祉士）養成大学の就職決定後の4年生22人、卒業生10人。調査対象者の選定にあたっては出身地や就職先が多様になるように調査対象集団となる当該学科の教員に推薦を依頼し、協力の同意を得られた者を対象とした。

3.1.3 調査方法：半構造化インタビュー。4年生は就職先決定後に2～7人のグループインタビューを7回行い、卒業生は個別インタビューを行った。

3.1.4 調査項目：職種選びから決定までの流れ（プロセス）、就職先選びから決定までの流れ（プロセス）、就職先を県内、もしくは県外に決めた理由、これからの生活設計。

3.1.5 倫理的配慮：研究の目的および調査方法、調査への協力は自由意志に基づくものであることインタビューの録音、調査結果の公表の方法（プライバシーの保護）について説明し、同意を得てインタビュー調査を行った。研究に際し調査当時の報告者の所属機関の研究倫理委員会の承認（承認番号1649、1653）を受けた。

3.1.6 分析方法：インタビューデータを逐語録におこし、MAXQDAソフトを用いて逐語録をコーディングし、抽出されたコードから、福祉職を志望するプロセス、大学選択のプロセスに焦点化してキーワードを生成し、キーワードをカテゴリー化した。以下の結果と考察における「」は逐語録からの引用であるが、発言者の特定を避けるために属性は伏せて記述する。

3.2 調査対象者の概要

表1に調査対象者の概要をまとめた。調査対象者の出身地は、青森市11人、弘前市3人、黒石市2人、平川市1人、八戸市5人、三沢市1人、むつ市1人、県外8人（秋田3人、岩手1人、山形1人、福島1人、北海道1人、福井1人）であった。調査対象校は青森市にある公立大学であり、県内でも都市部の出身者が多いことは県内の地域間格差の影響があったとも考えられる。4年生の卒業年は2016、2017年（2012、2013年入学）、卒業生の卒業年は2003年～2013年（1999～2009年入学）であるが、対象者の特定を避けるため表には明記していない。調査対象者32人のうち、女性24人、男性8人で、奨学金を借りていた人は24人、社会福祉協議会の大学進学者向けの「福祉資金」を借りていた人が1人であった。どの入試で入学したかは、調査項目にはないが、自発的に語った人のみ表に付した。

表1 調査対象者32人の概要

*は男性

	出身地の 県内外別	就職形態	出身市町村 (出身県)	奨学金	入試	初職 就職先	卒業時の職種 (卒業生は就職後のキャリア、婚姻状況)	
4 年 生	県内出身	地元就職	青森市	○	推薦	青森県	福祉、相談職	
			青森市	○	AO	青森県	福祉、支援職	
			青森市 *	-		青森県	福祉、支援職	
			青森市	○		青森県	福祉、相談職	
			黒石市	○	推薦	青森県	福祉、支援職	
			弘前市	-		青森県	福祉、相談職	
			青森市	-		青森県	福祉、公務員	
			八戸市	○		青森県	福祉、支援職	
	地元外就職	八戸市	○	推薦	宮城県	福祉、公務員		
		八戸市 *	○	推薦	埼玉県	福祉、相談職		
		弘前市	○	推薦	北海道	福祉、相談職		
		秋田県	○		青森県	福祉、公務員		
	I ターン	北海道 *	-	編入学	青森県	福祉、相談職		
		県外出身	地元就職	福井県	-		福井県	福祉、支援職
				岩手県 *	-		岩手県	福祉、支援職
			地元外就職	秋田県	○	一般（後期）	岩手県	福祉、支援職
	福島県			○		宮城県	福祉、相談職	
県内出身	地元就職	八戸市	○		青森県	一般企業、営業職		
		平川市	○		東京都	一般企業、美容系		
	地元外就職	青森市 *	○	一般	宮城県	一般企業、教育系		
		三沢市	○		東京都	一般企業、福祉系		
県外出身	地元外就職	山形県	○	一般（後期）	東京都	一般企業、福祉系		
卒業生	県内出身	地元就職	黒石市 *	福祉資金	浪人、一般	青森県	福祉、相談職、既婚	
			青森市	○		青森県	福祉、初職（相談職）→相談職（県内）、既婚	
			八戸市	○		青森県	福祉、初職（支援職）→退職、既婚	
			むつ市	○	推薦	青森県	福祉、支援職、未婚	
			青森市 *	○		青森県	福祉、初職（支援職）→福祉職→相談職（県内）、未婚	
			青森市	○	一般	青森県	福祉、支援職、未婚	
		地元外就職・ U ターン	青森市	○		宮城県	福祉、初職（支援職）→福祉職（県内）、既婚	
			弘前市 *	○		神奈川県	福祉、初職（支援職）→福祉職（県内）→相談職（県内）、未婚	
		地元外就職	青森市	-	浪人	東京都	福祉、公務員、既婚	
		県外出身	地元外就職	秋田県	○		宮城県	福祉、初職（公務員）→公務員（県内）、既婚

4. 結果と考察:専門職養成大学進学者のキャリア志向

本調査は、大学卒業後にどのように就職先を決定したのかを明らかにする目的で行われており、「職種選び」に

において福祉職を志望するプロセスについての語りで大学進学動機（なぜこの大学を受験したのか）や当時の進路選択の状況が語られている。以下では、主に青森県出身者の語りから抽出された5つのカテゴリーに沿って（表2）、コードから生成したキーワードを考察する。

表2 カテゴリーとキーワード

カテゴリー	キーワード
1) 濃淡のある福祉職志望	①明確な福祉職志望 ②ぼんやりした福祉職志望 ③就職への期待を背景とした福祉職志望（資格志向） ④進路選択を迫られる中で見いだされた福祉職志望
2) 進学先選択過程における入試形態の影響	①福祉職志望と理系科目の成績の悪さ（文系の専門職） ②福祉職志望と結びつく推薦入試やAO入試 ③就職か進学かと親の態度 ④消去法的な選択としての一般入試による入学
3) 福祉職志望と家族環境	①キャリアモデルとしての家族・親族 ②家族イベント（祖父母の入院）を通して社会福祉士を知る ③祖父母との同居や近居による高齢者への親しみ
4) 経済事情と家族環境	①家庭の経済的事情による県内進学 ②高校での奨学金の申し込み ③学費や生活費を自分で負担する〔在学中の経済状況〕
5) 地元志向と県内進学	①県外に出たいと思わなかった ②実家から大学に通いたい ③家族のそばにいたいのが当たり前の感覚がある〔県内就職者の語り〕 ④家族の中の自分の立場（一人っ子、長男、誰か一人は親のそばにいる）

4.1 濃淡のある福祉職志望

社会福祉士という職業を知ったきっかけは様々あることが語られているが（福祉職の家族・親族、中高でのキャリア教育、職人講話、オープンキャンパス、高校教諭、性格診断など）、入学の時点で福祉職を志望していたかどうかにはかなり濃淡がある。

4.1.1 ① 明確な福祉職志望

調査対象者の中で最も早く志した人は、「小学校5年生の時から、ずっと社会福祉士になるのが夢で」といい、「社会福祉士になるのに、じゃあどうしたらいいんだろうって調べて、4年制の福祉系大学卒業なら確実なんじゃないか」と考えて志望したという。幼いころから「福祉系に行きたいっていうのは決めてて」という人は、中学校の頃に「自分のなりたい仕事を調べてみようみたいな、そういう時間があって、そのときに、社会福祉士っていう資格を知って」その後、高校1年の担任教諭に県内に養成校があると教えてもらい受験校を決定したという。

児童福祉や子どもにかかわる職業をめざす人もいる。「幼なじみが登校拒否で引きこもり」になってしまったことをきっかけに「児童相談所で子どもの支援をする」職業に就きたいと願った人や、もともと保育士志望で母親が児童相談所で臨時職員をしていたのをきっかけに児童相談所を高校生の時に知り、「児童福祉司とか児童指導員が取れる大学を選んだ」という人もいる。

介護や高齢者福祉をめざす人もいる。中学校で福祉をめざし高校で介護福祉士の資格をとったが「勉強してるうちに福祉についてもう少し勉強したい」と考えて志望した人や、高校でヘルパー2級を取得し「介護の勉強してるうちに社会福祉士っていうのが出てきて、…もっといろんな自分の仕事の幅が広がるんじゃないかなと思って。AO入試で入れたら大学行こうって感じで来ました」という人もいる。

もともと福祉系に進みたいと強く志望していた人や、児童福祉や高齢者福祉（介護）といった分野で明確に社会

福祉士をめざした人に進路選択されている。

4.1.2 ② ぼんやりした福祉職志望

明確に社会福祉士をめざした人がいる一方で、ぼんやりと福祉職を志望した人もいる。

「家から一番近い大学だった」という人は、「昔から漠然としても（人の）役に立ちたいなっていうのを思っていて。社会福祉学科に入ってみようかな」と考えたという。高校1年の進路調査では「特に何やりたいていうのもなかった」という人は、「でも、何かしら人のためにというか、仕事できればいいのかなってぼんやり思い浮かんで、親に相談して、福祉の仕事や大学を教えてもらったという。

「ボランティアとかは結構昔から好きで、そういう奉仕活動とかしてた」という人は、「県内の大学に入って安くて、自分のちょっと興味あるところって行って、見つけたのがここで」あったといい、「福祉っていう全体的なフワッとした感じは好きなんです」という。

保育士志望だったという人は「こういえばなんか不純な動機になっちゃうんですけど、4年制の大学に行きたかったんです」という。「保育士だと短大になるところがほとんど」のため、「子ども好きだし、でも、人の役に立ちたいっていういろいろなある選択肢の中で、一番近い大学」を選んだという。

「祖父母が身近なところにいる、幼い頃から祖父母と共に生活してきたので、福祉が自分にとって身近だった」という人は、「社会福祉学科っていうのは、あまり学科として聞いたことのないような、割と珍しいのかな」と感じており、「あまり聞いたことのないような学部に行ったほうが面白いんじゃないかっていう少し軽い動機もあって来た」という。

明確ではないが、何らかの形で人の役に立ちたい思いや「軽い動機」と実家から近い大学であることや4年制大学であることなどの理由が重なって、ぼんやりと福祉職が志望されている。

4.1.3 ③ 就職への期待を背景とした福祉職志望（資格志向）

明確に、あるいはぼんやりと福祉職をめざして志望した人とは異なり、卒業後の就職や資格取得を期待して志望したことが語られている。「卒業した後に就職にどうつながるかというと考えて」大学を選んだ人や、「就職につながればいいかなぐらいの。つながらなくても一般のほうでも働ければなんぐらいの」つもりで大学を選び、「なので絶対にこの職種になりたいって行って入ってきたわけではないです」という人もいる。

福祉以外に大学で学びたいことや得意な科目があったにもかかわらず選んだ人もいる。「すごい読書好きで、文学とかも大好き」という人は、「古典文学に本格的にはまりだして、文学部とかもいいかなと思ってた」が、この大学への推薦ももらい、「文学部出たところで就職ないし、まだやっぱり社会福祉士になりたいって気持ちもあったから、いいやってみよう。考えないそれはって思って」という。高校のときは進路で悩んだという人は、「歴史とかそっちのほうで得意ではあったんですけども、たとえ歴史とかやったところで一体どこで働くんだったっていうような、働き口が。好きなことと仕事できるってことはなかなか結び付くのは難しいかなって考えてた」といい、「資格も取れますし、これから先、高齢化とかで就職口も広がってことを考えたときに、福祉のほうを選ぶっていう結論になりました」という。「(大学で) 経済やって何になるか」を考え、「専門職って資格も取れるしってところはやっぱり大きかったかもしれないです」という人もいる。

大学で何を学びたいかということよりも、卒業後の就職や大学で取れる資格への期待から志望した人がいる。

4.1.4 ④ 進路選択を迫られる中で見いだされた福祉職志望

保育士や幼稚園教諭、教員などを志望し、進路選択の過程でその職種に近い職種として志望する人もいる。「親戚がいっぱいいいて、子どものちっちゃい子の世話とかすることが多かった」という人は、保育士をめざそうと考えていたが、大学入試で「保育士取れる大学」の「(推薦の) の枠から漏れて」しまったために別の進路を考えたという。当初は「本当に漠然と、それこそ学校とか幼稚園とか子どもがいる環境の中で自分は働きたいくらいしかなかった」という人は、「本当に子どもと接して関わられる仕事だったら極端に言えば何でも良かった」と考え児童福

祉を志望したという。

センター入試までは別の職種を志望し、その後に変更した人もいる。「高校3年生のときに漠然と思っていたのは、子どもと関わる仕事がしたい」と考え、「最初は教育学部に行こうと思っていた」人や、「学校の先生になるか、会社の社長になるか、どっちかになりたい」と考え私大の商学部か国公立の教育学部を志望していた人がある（後述4.2.4 ④）。もとの志望職種から、実際の受験校を絞っていく過程で「現実的な」選択として見出された進路になっている。

4.2 進学先選択過程における成績と入試形態の影響

高校での成績やどの入試形態から入学したのかについてはインタビュー調査項目にないが、約半数の人が進学先を選ぶ過程で自発的に当時の成績や入試形態について語っている。受験校を選択する過程では、どのような職業に就きたいかだけではなく、どちらかというそれ以上に入試形態や当時の成績がその選択に影響を及ぼしている。

4.2.1 ① 福祉職志望と理系科目の成績の悪さ（文系の専門職）

多くの高校では2年生で文系と理系に分かれる。高校1年のオープンキャンパスで「そもそもは保健師になりたくて」看護学科にきた人は、担任教諭から「おまえは理系に向いてない」といわれており、「実際問題、数学の成績はもう散々なものだった」という。社会福祉学科のオープンキャンパスをのぞいて「もともと人を支えたいなっていう、支える職に就きたいなっていうのは思ってたので、文系であってもこういう仕事があるんだなって、初めてそこで知って、そっちにシフトして入ってきた」という。

「数学が超できなくて、毎回赤点ばかり取るぐらい数学だけ、本当に駄目で」という人は、入試科目で数学がいらないことを理由に「ずっと判定もAだし、ここにしようと思って、ここにしました」という。「数学が嫌いだったんで理系にはまず行けないけど、文系の社会福祉学科っていうのがあるのが分かって。もともとおばあちゃんとか好きだったんで、どういうことできるのかなと思って目指したのが大学に入るきっかけではあります」という人もいる。

理系科目（数学）の成績の悪さと入試で理系科目が不要だったことが大学選びに影響している。医療系の専門職は理系科目が必要となることが多いが「文系」向けの資格職志向と結びつきやすい進学先でもあるといえる。

4.2.2 ② 福祉職志望と結びつく推薦入試やAO入試

福祉職を志望していた人は推薦やAO入試で入ってきたことを語っている。「介護の勉強をして」福祉職を志望した人は「その推薦の枠の中でそういう福祉のほうの推薦のやつがちょうどあったので、その中で採っていただいた」という。高校1年生の職人講話で、「ソーシャルワーカーさんが高校に来てお話ししてくれた機会があって、それ聞いて自分もそれなりになりたいな」と考えた人は、その養成大学が県内にあることを知り、「ずっと高校1年生から第1志望ここだったので」推薦で入学したという。

社会福祉士をめざして推薦入試で入学した人は「でも、頭はなかったもので、ずっとE判定とかで、まじで推薦が落ちたら多分うちはここにいないですって感じですね」といい、推薦で入ってきたことと高校での成績に言及する人もいる。

4.2.3 ③ 就職か進学かと親の態度

「AO入試で駄目だったら親にもう就職しなさいって言われていた」という人は「AO一本で絞ってそれが駄目だったとき用に就職用の資格取ったりとかはしてました」という。明確に福祉職を志望してAOや推薦入試から入学してきた人のなかには大学進学か高卒就職かの選択をしてきた人もいる。高校で介護福祉士の資格をとり、同級生の9割は介護職で就職するクラスの卒業生であった人は、「親から進学したらって言われる前までは、ちょっと就職のほうがいいかな」と考えていたといい、「進学したいって気持ちはありながら、特に親にそれをしゃべ

ってなかったのですが、でも親のほうからそう言ってくれたので」と言い、大学進学を選択するには入試形態とともに親の態度の影響があることが推察される。

4.2.4 ④ 消去法的な選択としての一般入試による入学

4.1.4 ④で述べたように、もともとの志望校とは異なるが、「センター試験の失敗」をきっかけに受験校を絞る中で決定した人がある。

もともとは教育学部を志望していたが「センター試験で失敗した」という人は、「センターで失敗しましたってなったときに、センターリサーチを見て、間違いないな、もう勉強2度としなくても絶対入れるなぐらいの圧倒的リードがあったので、大学は選んじやった」という。工業高校卒で理工系の大学を志望し浪人していた人は、「センター試験失敗して」しまったことから、受験できる大学を探し「特養（特別養護老人ホーム）の相談員」をしていたおじから「その領域興味あったら」と前々から薦められていたため受験したという。もともと「センター試験受けるまでは県外、それこそ神奈川のほうの大学も希望はしてた」という人は、「現実的に点数が足りなかったんでそこは諦めていけそうなところを」受験したという。教育学部志望であったが「センター試験の点数がすごく微妙で、そのまま教育学部を受けるか別の道を探すか」を検討したという人は、「自分の受けた科目でも受験ができるっていうのと、自分の受けれる学科の中でも児童福祉っていう分野があって、福祉のほうからも子どもに関われる仕事があるんだ」と知って、「受かりたいので、ちょっと安全策を取ってでもないですけど進路を決めた」という。

「センター試験の失敗」をきっかけに入学してきた人は、いわゆる“不本意入学”であったとも考えられる。調査対象校では、入学定員の半数以上は一般入試から入学するが、「一般（入試）受けた人は本当に福祉進みたかった人って、本当に片手に入るぐらいしかないだろうと自分は思ってます。勝手に」と語った人もおり、一般入試で入学してくる人の中で福祉職を志望する人は実は多くないと考えられる。

4.3 福祉職志望と家族環境

福祉職を志望した人は、家族や親族が福祉職や関連職種で働いており、そうしたことをきっかけにしていたり、家族イベントや家族環境から福祉への関心を育む人も多い。

4.3.1 ① キャリアモデルとしての家族・親族

「ずっとうちのお母さんが福祉系の仕事して」いたという人は、幼い時から母に「福祉、大事みたいなことをすごく教わっていたし」という。父親が「病院関係の仕事もして」いて、「病院で働けばなあと思ってましたね」という人もいる。父親が「児童養護施設の施設長」をして、母親も「保育士という職業、病児保育という職業」で、「福祉という存在が身近にあった」という人は、「漠然とですけども自分も福祉の職に携わるんだなっていう実感っていうか、そういう感情はありました」という。

福祉関連職の親から福祉系に進むことに反対や心配されたことも語られている。母が介護福祉士で「老健（介護老人保健施設）の相談員の仕事」をしている人は、「最初この大学で社会福祉学科に入学するのを、絶対じゃないですけどある意味反対。大変な、本当に大変な仕事だよっていうのは何回も聞かされました」という。父が「介護の仕事」をしているという人は、「大変だよとは何回も言われました。大丈夫？って」という。

福祉職や関連職種の家族や親族は、進路選択における現実的なキャリアモデルにもなっており、のちに相談や励ましなどの役割も果たしているようである。

4.3.2 ② 家族イベント（祖父母の入院）を通して社会福祉士を知る

祖父母の入院や通院をきっかけに社会福祉士という職業を知った人もいる。高校3年の夏に「おばあちゃんの病院にいったときに、（医療ソーシャル）ワーカーさんが来てくれて、いろいろ相談に乗ってくれて」という人は、その職業を調べて社会福祉士の資格を取って病院で働いている人だと知り、めざしは始めている。母親がケアマ

ネージャーで「おじいちゃんが難病だったりして、結構介護とかそういうのがすごい身近なもの」であったという人は、母がしているケアマネになるには資格を取って5年経験積まねばならないことを知り、「資格どうせ取るんだったら相談系、取りたいなと思って」社会福祉士を選んだという。

社会福祉士という資格を知るというだけではなく、社会福祉という領域への関心を見つけた人もいる。祖母が病院で「拘束されてる姿」を見て「すごい衝撃だったんですね。何が起きてるんだろうって思ったんですよ」という人は、「福祉の感覚」や「どういう価値観なんだろう」ということを「勉強してみたい」と考えたという。

こうした家族（祖父母）が病院や医療とかかわる何らかの家族イベントは、高校生には認知度が高くない社会福祉士という職種や福祉という領域を知る機会でもある。

4.3.3 ③ 祖父母との同居や近居による高齢者への親しみ

もともと介護や高齢者福祉をめざしていた人は、祖父母世代や高齢者への親しみを持つ人も多い。「もともとおばあちゃんとか好きだったんで、どういうことできるのかなと思って目指したのが大学に入るきっかけではあります」という人や、「介護したいっていうよりも、おじいちゃんとおばあちゃんと一緒に過ごす感じが好きだった」という人がいる。

そうした感覚の背景には祖父母との同居の経験がある。「同居していた祖母の、俗にいうおばあちゃん子ということであった」という人は、「祖母の友達とかを、うちに来たときに話したりとかいうところから、徐々に介護をやりたい、興味が湧いてきた」といい、「この人たちの今後をどう支えていくのか」を考え、「施設に勤めればこの人たちを支えられるのかな、と思ったのが多分、最初だったと思います」という。

こうした祖父母や高齢者への親しみは、三世同居や近居、高齢者の多い地域で育ったことによることによって育まれていると考えられる。むろん、祖父母と同居経験がない人もおり、そうした感覚は一樣ではない。4年生のグループインタビューでは、これからの生活設計についての調査項目で、将来の義父母との同居への強い忌避感が語られており、その理由に祖母と同居し始めてから「家族全員ストレス」を抱えている体験を語る人もいた。

4.4 経済事情と家族環境

福祉を志望したというより県内にある公立大学を志望したと語る人もおり、その理由として最も率直に語られるのは経済的理由である。

4.4.1 ① 家庭の経済的事情による県内進学

実家から通えるため一人暮らしの費用も不要で「一番経済的に楽な大学ではあった」という人は、「下に妹2人いて、みんな大学に入るためにはみんな公立だったら（奨学金借りずに）入れる」といわれていたといい、「そこ（県外大学や私立大学）までお金出してもらってまでやりたいことがなかった」という。大学を「まず県内の学費が安い所で、自分の学力で入れて」という基準で選んだ人は、「兄がいて、兄も大学に通ってたので、親から言われたりはしなかったけど、経済的な負担とか掛けたくないなと思って、それで学費とかを選ん」だという。

親に経済的負担をかけたくない、きょうだいの学費を考慮するといったことは、親に直接言われた人もいるが、多くは自発的にそうすることを選択したことが語られている。

4.4.2 ② 高校での奨学金の申し込み

調査対象者32人のうち、奨学金を借りていた人は24人、社会福祉協議会の大学進学者向けの「福祉資金」を借りていた人が1人であった。

大学進学のために高校で奨学金を申し込むことは「普通に」なっており、「高校のときに生徒みんなで奨学金の申し込みした」という人は、奨学金がなければ大学進学が難しかったというほどではないが、「みんなで登録」という。そうした奨学金について「それは借金だから、よく考えろ」といわれたという人は、「だから結局お金ある子とか、親が学資保険積んでた子とかは、話し合っただけで奨学金受けなかったって感じだったんですけど。うちは

普通に金ねえぞって話で」奨学金を借りたという。

4.4.3 ③ 学費や生活費を自分で負担する [在学中の経済状況]

奨学金を借りていた人の経済状況はかなり厳しいものであった。

自宅生で「学費を自分で払うことで大学に通うってなった」という人は、将来のことを考えて今、「(大学に行くために) 負債になるもの背負うか、将来高卒で働いたときにどっちがいいだろうなって考えて」進学を選び、「学費も全くもらったことないし、携帯とか本当に自分にかかるお金は全部自分で。奨学金とバイトのお金でどうにかしてたんで」という。

一人暮らしをしていた人でも、親からの仕送りももらわず、奨学金とバイトでやりくりしていた人もいる。奨学金がなければ「厳しいです」という人は、「奨学金で家賃を払って、バイトをしてバイトで免許を取ったりとかしてた」といい、親からの仕送りも「最初のあたりはしてもらってた」ものの、「バイトも軌道に乗った」以降は「それで授業料とかも払いながら、できるようになった」という。奨学金を「がつつりもらってました」という人は「仕送りなかったんですよ。家賃を奨学金で払って。学費は払ってもらってたんですけど、あとの生活費はバイトで。だから結構バイトざんまいでしたね。なかなか大変でした」という。

奨学金の返済額は人によって異なっており、卒業生では30代半ばで奨学金を返済し終えた人もいるが、4年生は返済への将来不安を語っている。

4.5 地元志向と県内進学

地元志向から県内進学した人は、福祉職を志望して県内進学を選んだ人もいれば、県内進学を前提に「いける大学」を選んだ人もいる。

4.5.1 ① 県外に出たいと思わなかった

「福祉を学び、いろいろ調べる中で、福祉系に行こうって高校時代に思ってた人は、「福祉を学ぶんだったら、別に県外に出る必要ないよなと思ったので、そのままこの大学に入ったっていう形ですね」という^{註2)}。

大学進学で県外に出てみようと考えたことが「ないですね」という人は、「県外出る勇気がなかったっていうのもある」といい、その理由として「一人暮らしをして新しい環境からっていうよりは、こっちで知っている人(家族や友人) がちょこちょこいるっていう環境の方がどうしても安心なので」という。これまで県外に出ようと思えることは「なかった」という人は、「あんまり出たいって、今もですけど思ったことがないです。そんなに都会とかに憧れもない」といい、のちに県内に就職している。一方、卒業後に県外に就職する人の中には、大学進学で「本当は上京したかった」という人もおり、県内進学を後悔し「その後悔を晴らしに行くみたい」な思いで県外就職を決めたと語っている。

4.5.2 ② 実家から大学に通いたい

そもそも実家から出たくない人もいる。「全然、家から出たさは全くゼロなので。なんかもはや一人暮らし寂しい、不安みたいな感じになるので、出るってなると、そこを乗り越えて行かなきゃ駄目なんで」という。また、「本当に通える大学、もういいや、通える大学に入っちゃえぐらいの感じで、実家から出なかつただけなんで」という人もいる。そして、後の就職活動においても、実家から通える就職先を選ぶ人もいた。

4.5.3 ③ 家族のそばにいたいのが当たり前の感覚がある [県内就職者の語り]

県内にいたい理由として地元志向とともに家族のそばにいたいのが当たり前という感覚が語られている。大学進学時の感覚として語られているわけではないが、就業地を選ぶにあたって、「周りに家族がいて当たり前っていう感覚は今もあります」という人は、父親が倒れて、「「待って、今度行くから」っていえる距離にはいけないのは、なんか寂しいかなっていう感覚もあります」という。

大学生の時に祖父母が亡くなる経験をした人は、「親が葬式の準備をしてるとかそういうのも見ると、自分もい

ずれ、もしかすればそういう、老後じゃないですけど何かあったときに駆けつけたりとか。…（近くにいたほうが）いいかなってというのは感じましたね」という。就職活動で東京と青森の内定を得た人は、祖母が亡くなる経験をして「今青森にいたからそのまま普通に葬式とか出れたんですけど、東京行ったらそれも厳しくなるんじゃないかなと思って」、「何かあったときには駆け付けられるようにって考え」た結果として青森で働くことを選択している。

4.5.4 ④ 家族の中の自分の立場（一人っ子、長男、誰か一人は親のそばにいる）

家族のそばにいたいかどうかと関連して一人っ子や長男であることが影響しているとも考えられる。家族関係は調査項目にはないが、県外への移動や県内への定着の理由と関連づけて語られるのは、一人っ子や長男であること、きょうだい県内あるいは県外にいるといった状況である。

県外に出るか出ないかについて、「一人っ子は大きいです、かなり。自分で背負っちゃう、私が見なきゃとか」という人は、「だから自分もきょうだいがいれば変わってたかもしれない。後よろしくみたいな。でも1人だから」という。「何となく、あんまり親とそこまで離れるのもなあっていうのは。家庭環境的に、私、一人っ子なので。何かあったら自分が戻ってくるしかないの」という人もいる。

こうした考えは、親に言われてというよりは、自分でそう察する傾向がある。一人っ子であるため、親は「青森にいてほしいとか、実家から通える所にしてほしいとは言わないですし、県外が駄目とも言わなかったですけど、恐らく本音を言えば、近くにいてほしいんじゃないかな」と想像している。

一方、きょうだいのいる人は、きょうだいのなかで誰か一人は親元や県内にいることを前提に県外就職を選択したことや、誰もいなくなるので県内にとどまる選択をしたことを語っている。

5. 小括

本稿の調査対象者の大学入学時期は、青森県で大学進学率が高卒就職率を上回っていく時期にあたる。調査対象者は県内の都市部の出身者が多く、青森県内の大学進学機会の地域間格差の影響があると考えられる。こうした状況下で、福祉専門職で働くことをめざした人、大学進学を前提として受験校を選んだ人、進学か就職かの選択肢で進学を選択した人とがいた。こうしたキャリア志向の背景には、県内に進学先があること、当時の成績や入試形態、家庭環境、とりわけ家庭の経済事情や親の態度が直接的、間接的に影響していると考えられる。

調査対象者のなかには、明確に福祉専門職に就くことをめざしていた人とそうではなかった人がおり、地方の公立の福祉系の専門職養成大学は、福祉専門職を強く志向する人の進学先として、また、地元志向を持ち、大学進学を企図しながら経済事情を背景として県内大学で専門職や就職に結びついているという期待から「現実的な選択」として進路を選ぶ人の受け皿として機能しているといえよう。いわゆる“不本意入学”であったと察せられる人もいるが、入学後の教育課程を経て、福祉専門職や一般職への就職を果たしている。本稿で対象とした社会福祉士という職種は認知度の高い職業ではないが、早い人で小中学生、多くは高校生の頃の進路選択の過程で知っていた。多くの医療系専門職とは異なり、いわゆる「文系」でめざすことのできる進学先として期待されている側面もある。また、進学時の経済事情による県内大学進学希望や、卒後の奨学金返済への言及からは、大学進学への経済支援の必要性が強く示唆される。

本稿で分析の対象とした語りは、就職決定後の時点からの回想法による進学動機の語りであり、現役学生のリアルな声とは言えない。しかしそれゆえに、大学進学の時点で福祉専門職をめざしてはいなかった人々の赤裸々な進路選択の状況が語られていたともいえよう。大学進学における「現実的な選択」に向き合った人々の語りからは、地方において、国公立の「文系」で、就職や職業に結びつく進学先の選択肢の少なさが反映されているとも考えられる。卒後には福祉専門職への接続だけでなく多様な職種への接続も果たされており、地方においてこうした進学機会を保障していくことは、地域社会と若者の双方にとって重要であるといえよう。

謝 辞

本調査は、COC+事業である「オール青森で取り組む『地域創生人財』育成・定着事業」における「女子学生のキャリア形成支援ワーキンググループ」の助成を受けて行われました。本研究にご協力くださいました皆さまに心よりお礼申し上げます。

利益相反 開示すべき COI 状態はありません

注

注 1) 社会福祉士は社会福祉業務に携わる人の国家資格であり、「社会福祉士及び介護福祉士法」(1987)により位置づけられた「名称独占」の資格である。国家試験合格率は3割程度である。

注 2) 青森県外の東北出身者は、出身県内に私立大学しか社会福祉士の養成校がなく、東北圏内で国家試験合格率がよい公立大学だからという理由で選択したことを語っている人もおり、福祉職を志望していた人が多い。

引用参考文献

- 1) 石黒格. 青森県出身者の社会関係資本と地域間移動の関係. 教育社会学研究 102 : 33-53, 2018.
- 2) 李永俊, 石黒格. 青森県で生きる若者たち. 弘前大学出版会. 161-162, 2008
- 3) 廣森直子. 専門職養成は属性を超えて若者のキャリア選択に影響を及ぼすか—地方の福祉系大学生・卒業生へのインタビューから—. 青森保健医療福祉研究 3(2) : 41-52, 2021.
廣森直子. 地方の若者の地域移動・定着とキャリア選択に関する探索的研究 —福祉系大学生へのインタビューからみる就業地の選択—. 青森県立保健大学雑誌 18 : 43-51, 2018
- 4) 阿部誠. 地方で暮らせる雇用 - 地方圏の若者のキャリアを考える. 旬報社. 117-211, 307, 2021
- 5) 朴澤泰男. 高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動. 東信堂. 2016
- 6) 廣森直子, 宋美蘭, 上山浩次郎, 上原慎一. 青森県における高卒後の進路状況に関する研究 : 地域間格差, ジェンダー差に着目して. 北海道大学大学院教育学研究院紀要 140 : 337-351, 2022
- 7) 青森県統計分析課『「令和3年 青森県の人口」について (概要)』2022. 2. 21
- 8) 文部科学省「学校教育基本調査」年次集計、卒業後の状況調査 高等学校
- 9) 青森県教育委員会「高等学校等卒業者の進路状況—令和3年5月1日現在—」

受理 2023年2月1日

公開 2023年4月1日

<連絡先>

廣森直子

〒536-8585 大阪市城東区古市 2-7-30

大阪信愛学院大学教育学部

E-mail : hiromorin@osaka-shinai.ac.jp